福島県立相馬高等学校
校長通信

Sincerity⑩

校長　菊田勇雄

令和２（2020）年２月２７日

卒業子去れり窓辺に教師暮れ

（林　翔）

３月１日は卒業式です。３年生はたくさんの思い出を胸に相馬高校を巣立っていきます。卒業生諸君は社会に出る喜びと将来の不安が入り交じった心境ではないかと思います。楽しかったことも苦しかったことも、経験のすべてが卒業生を成長させる糧になります。進学先でも就職先でも、校訓である「至誠」の精神を忘れず、何事にも真心を尽くして当ることを期待しています。本校で身につけた、何事にも誠心誠意を尽くすという姿勢があれば、よき理解者が現れ、活躍の場が準備され、道が開けるはずです。「至誠」の精神を羅針盤にし、勇気と希望を持って新たな航海に乗り出してください。私にも若い頃担任として送り出した生徒たちがいます。その一人一人の顔を思い出す度、心の奥から熱いものがこみ上げてくるのはなぜでしょうか。教師にとって卒業式の日は、３年間の苦労が報われた達成感と生徒たちが学校を去って行く喪失感が、胸中を行き交う不思議な日でもあります。

講武堂のこと

昨年 10 月の大雨で床上浸水した講武堂の床の張り替え工事が行われています。水が引いた後、床材の接合部分が反り返り、剣道部の生徒諸君が裸足で練習するには危険があることから、急遽工事に入りました。3 月末には工事が完了し使用可能となります。長い間、部活動に支障をきたしましたが、4 月以降は生徒諸君の気合いの入った声が響き渡ることと思います。

ところで講武堂の名称は、旧相馬中村藩の武道講習場であった講武堂に由来しています。幕末、講武堂は藩士が槍術と剣術を習得する鍛錬の場として設置され、全国より武士が集まる修行の場でもありました。大正 8（1919）年 1 月 8 日、それまで旧制相馬中学校で使用されていた武道場を講武堂と命名することになり、この日、全教職員・生徒が一堂に会して命名式が行われました。それまで武道場、雨天練習場、講堂など呼び方がまちまちでしたが、講武堂に統一されています。さらに同 12（1923）年には、旧藩主の相馬子爵より「講武堂」の扁額が寄託されました。当時の生徒は体育の授業や柔道部、剣道部の練習の時間にこの扁額を見上げながら、鍛錬に励み修養に努めました。現在の講武堂の入り口に掲げられている扁額は、業者に依頼して製作した複製品であり、実物は郷土資料室に展示・保管されています。

なお「講武堂」の扁額は第 28 代藩主相馬充胤（みちたね）公の筆を刻字したものです。充胤公は激動の幕末と明治維新を巧みに切り抜け、相馬中村藩を守り抜いた名君でした。当時、相馬地方は度重なる凶作による窮乏が著しく、藩財政の再建が喫緊の課題でした。充胤公は家老草野正辰の進言の受け入れ、二宮尊徳の農村振興策である御仕法を採用し、田畑の開墾を進め米の増産に努め、藩財政を窮乏から救いました。また、戊辰戦争の際、家督を子の季胤に譲り隠居していましたが、季胤の後見役として藩政に関わり、新政府軍に降伏謝罪することで領地を守り抜きました。「相馬偉人伝」では『充胤は或点に於ては尋常一様の才能を有するに過きされとも、或る点に於ては非常に発達したる天性を有せり。諫を容れて短を補ふ、是れ人君たるものゝ欠く可からさる量なり。』と述べられており、臣下の言を受け軌道修正する柔軟さがあったと思われます。私は「講武堂」の扁額を見上げるたび、相馬中村藩の苦難の歴史と本校との関わりに思いを馳せています。講武堂は本校の長い歴史を象徴する存在でもあるのです。

社会人の話を聞く会（1 学年）

２月６日、講堂において１学年主催の「社会人の話を聞く会」が行われました。講師は佐藤圭介さんと立花沙耶香さんのお二方です。佐藤さんは早稲田大学政経学部を卒業後、マーケティング会社で経験を積み、この４月から米国の多国籍企業で世界的に有名な GAFA の一つに入社が決まっています。立花さんは山梨大学教育学部を卒業後、本県教員に採用され福島市内の小学校に勤務しています。お二人は佐藤宏志先生の原町高校時代の教え子で、今回の依頼を快く引き受けてくださいました。

アップル創業者のスティーブ・ジョブズの伝説的なスピーチの中で語られた「Connecting the Dots」をテーマに、お二人の高校・大学時代と進路決定に至るまでの過程を、実体験をもとに話をいただきました。お二人の話に共通する点は、広い世界を知らずにいた若者が、大学入学直後に味わった危機感をバネに、自分を変えるための行動を起こし、徐々に成長していく姿でした。佐藤さんは大学時代、一日５時間の学習を自分に課し、サッカークラブの部長を務め、指導者資格を取得してサッカーコーチのアルバイトで収入を得、オーストラリアの大学に留学し、企業のインターンシップでビジネス経験を積むなど、さまざまな活動に取り組みました。立花さんは高校生にキャリア教育をする団体に所属し、オーストラリアに語学留学し、ワーキングホリデー制度を活用してさまざまな職種のアルバイトを経験し、帰国後は教員採用試験に全力を傾けました。

最後にお二人から１年生に向けてメッセージがありました。佐藤さんは「やりたいと思ったこと、必要だと思ったことは、とりあえず行動に移し、何か問題に直面したら、自分の頭で考えて改善する意識を持って欲しい」という話があり、立花さんからは「目の前にある一つ一つのことにしっかり取り組み、自分の視座を固め、視座を高くすることで視野を広がり、物事の本質が見えてくるはずである」という話がありました。また、高校時代はできる限り学力を高め、目標が見つかった時に対応できる力をつけておくこと、部活動に積極的に取り組み克己心を鍛えることの大切さも伝えていただきました。今回の講話は素晴らしい内容で、きっと生徒の琴線に触れたのではないかと思います。１年生の今後の変容が楽しみです。

終了後、校長室でくつろぐ佐藤さんと立花さん

国公立前期日程試験

２月 20 日、文部科学省は令和２年度の国公立大学入試志願状況を発表しました。前期日程が 3.0 倍、中期日程が 13.3 倍、後期日程が 9.3 倍となりました。25・26 日には前期日程試験が行われました。各大学はセンター試験と個別学力試験の合計得点で合否を判定します。本校からは前期日程に 34 名の生徒が出願しており、前期試験の合格発表は３月６日から行われます。受験した生徒全員が合格を勝ち取ることを祈っています。受験の神様が相高生に微笑んでくれますように。

卒業生による進路座談会（2 学年）

２月 20 日、２学年希望者を対象に卒業生による進路座談会が行われました。吉田龍平さん（埼玉大学）、中島涼介さん（山形大学）、高橋由梨さん（首都大学東京）の３名の卒業生をお招きし、受験勉強、学業と部活動の両立、大学生活についてお話をお聞きしました。３名とも在学中にバドミントン、バスケットボール、陸上競技など部活動に熱心に取り組みながら、国公立大学への合格を果たしました。生徒たちは先輩の話に真剣に耳を傾けていました。先輩から直接体験談を聞くことができ、生徒たちにとって大変有意義な座談会になりました。

学校評議員会が行われました

２月 21 日、第３回学校評議員会が行われました。当日は評議員の遠藤政弘様、阿部惠子様、金子洋一様に来校いただき、私から学校概況を説明した後、学校評価に関するアンケートの集計結果、各部・各学年・各教科の年度末反省について、ご指導とご助言を賜りました。相双地区の基幹校として、地域の皆様のご期待に応えるべく、教育活動の充実と特色ある学校づくりを進めてまいります。

同窓生列伝⑩　折笠晴秀（1885-1965）　続編

～帝国大学卒業と阿久津先生との出会い～

明治 40 年９月、折笠は東京帝国大学医科に進み、同 45 年７月に卒業しました。その学生生活については、今のところ詳らかではありませんが、東大医学部図書館に当時の卒業アルバムが残されています。その扉には「在學記念ノ為メ此帖ヲ作リ謹テ諸先生ノ座右ニ呈ス」とあり、当時の教授と学生の関係がよく表れています。その中に折笠の写真と直筆のサインも確認できました。アルバムには同級生の門馬末治の写真とサインもあります。旧制相馬中学時代、二人は常に学業面でトップを争う仲でしたから、おそらく大学でも互いに切磋琢磨しながら、学業に励んだに違いありません。また、帝国大学への進学者がほんの一握りの人間に限られた時代、帝大を卒業することは大変名誉なことでした。折笠が卒業後に故郷の小高町女場に帰省した時は、近隣の住民が祝いの旗を持って小高駅に出迎えに行くほどの歓迎ぶりでした。折笠は大学に残り細菌学教室と皮膚泌尿器科教室で研究生活を送った後、順天堂医院に勤務します。その経緯は明かではありませんが、我が国の泌尿器科学の権威であった阿久津三郎先生が深く関わっていたようです

阿久津先生は、明治６年、元相馬中村藩の藩医菅野三徹の三男として原町に生まれました。同 27 年、旧制一高から東京帝大医科に進み、同年、元大田原藩医阿久津家の養嗣子となりました。同 31 年に大学を卒業し、33 年より順天堂医院に勤務、34 年にヨーロッパに留学、ベルリン大学とウィーン大学に学び、36 年帰国とともに順天堂医院に泌尿科を創設しました。阿久津先生は特に腎臓剔出術の第一人者の地位を築き、全国から患者が集まったと言われています。

おそらく折笠は、同郷・同学の先輩である阿久津先生の誘いで順天堂に移り、ともに働くようになったと思われます。『順天堂史』には、医院主催のボート対抗レースが隅田川で行われた際、折笠が阿久津先生とともに出場している記述があります。また、大正５年、阿久津先生は独立し開業しますが、相馬出身者で結成された相馬郷友会が発行する『相馬郷』の動静欄には、阿久津先生と折笠の名前が連なって記載されており、折笠が阿久津医院副院長となったことを伝えています。折笠は阿久津先生のもとで泌尿器科医として研鑽を積み、やがて独立することになったと思われます。

折笠直筆のサインと写真

校内授業研究　Part 4

【12/16】**升田邦弘先生**の２年古典Ｂの授業は、屈原の『漁夫辞』を読み思考力と判断力を育てるものでした。生徒たちは漢文の基本的な句法を理解した上で、ペアによる話し合いを通じて訳を作成したり、屈原と漁夫の心情を考えたりする活動に積極的に取り組んでいました。

【12/17】**西山博文先生**の２年化学探究の授業では、中和滴定の実験が行われました。生徒たちは班別に実験を行い、濃度変換の公式を使って、食酢に含まれる酢酸の濃度の求め方を学習しました。滴定実験の成功が生徒に達成感を与える授業でした。

小河厚子先生は２年倫理の授業で思考実験の手法を実践しました。「自分が乗った AI タクシーがトラブルでブレーキが効かなくなった場合、どのような判断を AI にさせるか？」という課題に対して、生徒たちは自分が選択した行動と理由について、カントとベンサムの思想を参考に思考を深めました。

吉田文先生の１年英語表現Ｉの授業は、問題演習を通じて比較級と最上級を用いた表現について理解を深めるものでした。ペア学習を取り入れ、生徒同士が情報交換する時間を設けたり、視点を変えた英文を素材にしたりして、表現の幅を広げる工夫が見られるテンポの良い授業でした。

【1/28】**今野直樹先生**の２年物理の授業は、等速円運動を学習する内容でした。生徒たちはプリントを用いながら等速円運動の加速度を求め、等速円運動と他の値との関連性について学びました。黒板に描いた図を有効に活用し分かりやすく解説する工夫があり、また、生徒同士が教え合う活動も見られました。　〈つづく〉

イノベ事業成果発表会

２月 23 日、郡山市の日本大学工学部において福島イノベーションコースト構想の実現に貢献する人材育成事業の成果発表会が行われ、参加校 34 校の生徒 132 名、教員 48 名、合計 180 名が一堂に会しました。第一部の基調講演では、アメリカのスタンフォード大学創薬・創医療機器開発機構所長の西村俊彦氏が、「君たちに伝えたいスタンフォード大学で学んだこと」をテーマに講演されました。スタンフォード大学は、各分野において最先端の研究が行われており、西村先生からはスタンフォードの人材育成やグローバル人材に求められる資質についてお話がありました。参加生徒に向けてチャレンジ精神、失敗を恐れないこと、確立した個人を目指すことの大切さを繰り返し伝えておられたことが印象的でした。第二部の対象高校による活動報告会ではポスターセッションが行われ、各校の生徒がポスターをもとに１年間の活動報告を行い、参加者からの質問に答えていました。本校からは２年生６名、１年生５名が学校を代表して参加し、１年生は県内の先端研究施設見学、再生可能エネルギーに関する研究、ブリテッシュヒルズ英語研修について、２年生は地域の企業・研究施設見学、地域活性化プロジェクトについて報告しました。生徒たちは緊張した様子でしたが、一所懸命対応し立派に役割を果たしてくれました。